

成果報告書

団体名 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)奥田敦研究会

申請者氏名 代田 七瀬

1. 事業名

第6回 アラブ人学生歓迎プログラム(ASP2007)

*ASP=アハラン・ワ・サハランプログラムは、アラビヤ語で「ようこそ」の意。

2. 目的

アラブ圏の学生たちとの実践的な共同プロジェクトを通じて、アラブ・イスラーム世界との共通のビジョンを拓き、信頼と友好に基づく次世代の関係構築を展開する人材の育成。

3. 実施期間

2007年11月5日(月)～11月22日(木)

*レバノン人・モロッコ人は11月5日～19日(2週間)、シリア人は11月9日～22日(2週間)の滞在。

4. 実施場所

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)

5. 事業内容(①～③)

日本語を学んでいるアラブ人学生6名(シリアから3名、レバノンから2名、モロッコから1名)を日本へ招聘し、アラビヤ語を学んでいる日本人学生との共同プロジェクトを実施。

① 日本語スキット共同制作(計27時間)

ASPにおける中心的プロジェクトであるスキットの共同制作では、昨年に引き続き「サバイバル日本語2」を制作。招聘者6名がそれぞれ主演を務める短編を6作品制作し、それをつなげると一本の大きなストーリーになるように構成した。制作にあたっては、あらかじめ撮影場所と大きなストーリーのみを決定しておき、アラブ人と共に行うフィールドワークを通して、細かなストーリーやセリフを模索した。その後、台本作り、セリフ練習を経て、撮影を行った。このように共に一つのものを作る過程の中で、互いを理解し、影響し合い、常に自分たち自身に変化をもとめる。そうした方法が、単に相手の存在を認め、お互いが何者であるかを理解するのではなく、継続的で真に発展的なアラブ・イスラーム圏との次世代の関係を構築するための有効な手段だと位置づけている。

② 日本語授業(計18時間)

日本語の一層のスキルアップを図るため、また日本にいるからこそできる授業を提供するために、日本人学生とのディスカッションと日記添削を中心とする日本語授業を展開した。ディスカッション授業では、まず簡単な日本語の文章を日本人学生と一緒に読み、その後、グループに分かれディスカッションをした。ディスカッションのテーマは、滞在中に体験するもの、訪問する場所(日本におけるリサイクル、富士山など)とし、さらに個別授業では、招聘者各人の専門分野(教育、女性の人権など)をテーマにした。日記の授業では、招聘者に日本語で日記を書いてもらい、日本人学生が添削するという形式を毎日続けた。日々の中で、招聘者が読みたいものを選び、日記発表会も行った。

③ 日本文化体験(華道11月9日金11:10～12:40、着付け11月13日火11:10～12:40、茶道11月13日火16:30～18:00)

華道、着物の着付け、茶道を体験。華道では秋らしい4種類のお花(雪柳、竜胆、菊、小菊)が用意

された。華道の歴史や生け方を教わり、招聘者は個性を存分に発揮し、それぞれ生け花を楽しんだ。着物の着付けでは、日本舞踊の先生が招聘者への着付けをしてくださり、盆踊りや日本舞踊についても、映像を交えて丁寧に教えてくださった。茶道は、湘南藤沢茶道会の皆様の協力を得て実現。裏千家独特のお茶の味を親しみ、和やかな雰囲気の中で茶道を体験できた。

④ ワークショップⅠ アラビア語でのディスカッション(11月12日月曜日 16:30~19:40)

「日本とアラブ・イスラーム世界との友好的な関係を、個人のレベルでいかに構築することができるのか」をテーマに、アラビア語によるディスカッションを行った。皆熱心に耳を傾け、意見を出し合った。相互交流の促進、正しい知識を薦め合うこと、イスラームに対する学びを深めること、共に共通の課題に取り組むことなどが意見としてまとめられた。

⑤ ワークショップⅡ クルアーン勉強会(11月15日木曜日 14:45~15:45)

イスラーム教徒の招聘者が先生となり、クルアーン勉強会を実施。招聘者6名中5名がイスラーム教徒であり、ASPに携わる日本人の多くがイスラームを勉強しているため、共通のものを深め合い、共有できる機会となった。

⑥ ワークショップⅢ アラブ書道(11月21日水曜日 13:30~16:40)

シリア人学生2名が先生となり、アラブ書道の講座を開催。一人に一本、アラブ書道用のペンと、紙を用意してくれ、アラビア語を勉強しながらのアラブ書道体験となった。

⑦ 日本語スピーチ(11月16日金曜日 18:40~)

招聘者による5分~10分程度のスピーチ。レバノン・モロッコからの招聘者は二週間の日本滞在の総まとめとして、またシリアからの招聘者は一週間の滞在中を経験したことでのスピーチをした。招聘者の一人は「このプログラムは単に日本語を集中的に学んだり、アラビア語を教えたりするのではなく、より良く生きるために何をすべきかを共に考えるプログラムでした。」と述べ、全員がこのプログラムの意義を再認識し、共有できた貴重な時間となった。

⑧ お宅訪問(レバノン・モロッコ人学生は11月7日水曜日 16:30~、シリア人学生は11月20日火曜日 16:30~)

日本の一人暮らしの家を訪問する企画。狭い空間の利用方法に驚き、新しい発見をしたり、一人暮らしにおける利点・問題点について話し合ったりし、日本の生活の一面に触れることのできる新鮮な学び場となった。

⑨ 各地視察(11月10日、11月11日、11月17~18日)

横浜火力発電所の見学、東京ジャーミーへの訪問、浅草、江ノ島、富士山などへの小旅行を実施した。

⑩ その他

期間中はチューター制を取り入れ、常に日本人学生が招聘者をサポートした。長い時間を共に過ごすことで、日本語授業や生活面でのサポートに留まらず、相互理解を図る密な関係を育むことができた。

6. 事業成果の公表

本事業の成果は、「第6回 アラブ人学生歓迎プログラム(ASP2007)報告書」にまとめ、公表する予定である。また、ASP2007を紹介する専用のHP(<http://nafidha.sfc.keio.ac.jp/ASP2007/>)がすでに開設されており、期間中は日々新しい情報を更新した。さらに、慶應義塾大学オープン・リサーチ・フォーラム(ORF2007、2007年11月22・23日、於:六本木ヒルズ)にて本事業を中心とする学術交流活動の紹介を行った。

7. 今後の展望

今回は事業に関わった全ての人の積極的かつ主体的な参加と、新たな工夫により、昨年度に引き続き確実に活動の質を高めることができた。今後も日本とイスラーム圏を共通のビジョンでつなぐ人材の育成と、学生主体の学術的な相互交流の一層の発展に努めていきたい。